

54 モモの休眠覚醒に必要な低温要求量

福島県果樹試験場栽培部・平成12年度試験研究成績書

1 部門名 果樹—モモ—生理・生態

04-02-04000000

2 担当者 高野靖洋・志村浩雄

3 要 旨

モモの加温ハウス栽培における加温開始時期を決定するため、休眠覚醒に必要な低温要求量について検討した。試験は、‘あかつき’（2年生）と‘ふくえくぼ’（1年生）のポット植え樹を供試し、7.2℃以下の低温に753、849、946、1060、1151時間遭遇させた後、ガラスハウス内（最低温度15℃）に搬入加温し、発芽、開花及び結実状況を比較した。

（1）低温遭遇時間と発芽との関係を見ると、‘あかつき’では1060及び1151時間区で加温開始後15日と最も短期間で発芽に至り、発芽に至る日数は低温遭遇時間が少ない区ほど長くなった。特に、753時間区では加温後28日と最も長かった。最終的な発芽率は849時間以上の区では75～80%と処理による差は見られなかったが、753時間区では55.4%と明らかに低く、低温遭遇時間が不十分と考えられた。

‘ふくえくぼ’については1151時間区で加温後13日と最も短期間で発芽に至り、発芽に至る日数は低温遭遇時間が少ない区ほど長くなった。また、最終的な発芽率はいずれの区でも75%以上と高く、低温遭遇時間による差は見られなかった。

（2）低温遭遇時間と開花との関係を見ると、‘あかつき’では1151時間区で加温後21日と最も短期間で開花に至り、開花に至る日数は低温遭遇時間が少ない区ほど長くなった。特に849時間区では加温後29日、753時間区では加温後33日と加温後の日数を長く要し、その後の開花進展も遅かった。最終的な開花率は753、849時間区が32～43%と明らかに低く、946、1060、1151時間区では75～80%以上と安定した開花が得られた。

‘ふくえくぼ’についても、‘あかつき’と同様に低温遭遇時間が少ないほど開花に要した日数は長くなった。最終的な開花率を比較すると、1060時間区、1151時間区では70%以上であるのに対し、753、849、946時間区では50%前後と低い結果となった。また、753及び849時間区では、花卉が縮れた奇形花等が目立った。

（3）‘あかつき’の試験樹に関して花粉の発芽率を調査したところ、各区ともに60～80%程度の発芽率を有しており、低温遭遇時間による発芽率への影響は確認されなかった。また、試験樹の結実率の調査では、いずれの区でも50～70%程度の結実率を示し、低温遭遇時間による影響は見られなかった。

（4）以上のことから、モモの加温栽培において安定した開花を得るためには、‘あかつき’では7.2℃以下の低温に950時間以上、‘ふくえくぼ’については1050時間以上遭遇させた後に、ハウスの被覆、加温を実施することが効果的と判断された。